
夕焼け～それから～

夕満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕焼け〜それから〜

【Nコード】

N4130U

【作者名】

夕満

【あらすじ】

互いに惹かれ合うものがあり、恋人となった二人。けれどまだどこかすれ違う部分があつて…。『夕焼け』の二人のその後。 E I
ブリスタに投稿していたものをこちらに移しました

秋の夜風が私たちに優しく吹きつける。

「うう……。寒い……」

「はは。我慢だよ、宵咲せうさき」

「そんなこと言っただって寒い……。夕威ゆいは温かそうでいいなあ」

少し恨めしそうに夕威を見上げる。夕威は「そう？」と、首を傾げた。

あの後、幾度かの逢瀬を経て、私たちは付き合うようになった。まるで不思議な運命に引き寄せられたかのように出逢い。自分は現実的な人間だと思っただのに、今はこうして当然のように隣にはお互いがある。

私は夕威と出逢って、欠けていた何かが埋められたような気がして仕方ない。でも、それは私だけではないかと思う。

だって、夕威は何も言わないから。

出逢えて良かったとも、満たされているような気がするとともに、幸せだとも言わないから……。

私だけが舞い上がっているのだろうか。

あの日……。確かに夕焼けを見つめながら、互いの抱く孤独は同じだと、感じる事が出来たのに。

今は夕威の気持ちがるで分からない。

こんな私の気持ち、夕威は気づいているのだろうか。

「……」

横を歩く夕威の顔を見つめる。だが、その表情からは何の感情も読み取れない。感情を隠すのが上手い人だから。

「宵咲、僕の顔に何かついてる？」

「え？」

「さっきから見ているだろう？」

気づかれていたとは……。でも、それも当然か。気づかれてもおかしくないほどじっと夕威を見ていたのだから。

「…何も！」

私は短く答えた。そして少し早歩きをして夕威より前を歩く。今表情を見られたら、すべてを見透かされそうで怖かった。

「……」

夕威は何の反応も示さなかった。けれど、何か言いたいことがあるのだということは伝わってきた。

「夕威、何か言いたいことあるんでしょう？」

自分から話を振ることにした。何か悲しいことを言われたとして

も、自分から聞いておいた方が悲しみは少ない。

「……宵咲は、もう僕とはいたくないの？」

「え……？」

夕威の言葉の意味が理解できなかった。けれど、だんだんと体の中を夕威の言葉が駆け巡るのを感じると、血の気が引いていく心地がした。

「どうして……？ 夕威はもう、私とはいたくないの？」

「違うよ。でも、君は最近おかしいじゃないか。僕といたって全然楽しそうじゃないし……」

夕威の言葉は冷たくなり始めた秋風と共に吹きつけてきた。逃げ出したいくなるほどの冷たさで。

「…違、う…」

そんな風に思われていたなんて。

心が張り裂けてしまいそうだった。涙が、少しずつ視界をぼやけさせていく。

「……違う、よお……。だって、夕威の気持ち分からないんだもん…！ だから、悲しくて、怖くて、だから、だから……」

立っていることすら出来なくなつて、顔を覆いながらしゃがみこんだ。涙が次から次へと溢れてくる。

何て自分は愚かだったのだろう。自分の気持ちでいっぱいになって、相手の心を顧みないなんて……。けれどもそれも今更のような気がして仕方なかった。

多分、夕威も呆れ返っているだろう。今に彼の去る足音が響き始めるだろう。

私は恐怖と共にその足音がするのを待った。

しかしいくら待っても遠ざかる夕威の足音が聞こえない。私はおそるおそる顔を上げてみた。

「っ！」

顔を上げると、夕威の顔が目の前にあった。

「宵咲……、僕は君を不安にさせていたの？」

夕威の表情は見ている方が切なくなるほど悲しそうだった。

「違う……！ 私が悪いの。自分の気持ちだけしか見ないで、夕威の気持ちを考えもしなかったんだから」

「でも、不安にさせていたんだろう？」

不安でなかったといえば、それはまったくの嘘だ。でも……。

「いいの。私が悪いの。夕威はちゃんと想ってくれていたのに……。ねえ、夕威」

「何だい？」

「もう疑わないから、だから今だけ愛してるって言って」

そう言うのは、夕威に名前を尋ねた時以上の勇気が必要だった。すると夕威は切なそうに首を振った。

「疑ってもいいよ。その度に教えてあげるから。だから言わない。それに言葉なんてきつと意味がないよ。宵咲だって分かっているだろっ」

「…そうね」

確かにそうだ。言葉なんて意味がない。

きつと信じられるのは夕威という存在だけ。

「うん。……ありがとう、夕威」

まっすぐに夕威を見つめると、彼はこれ以上ないほどの微笑を浮かべた。

私の目から再び涙が溢れた。けれど今度の涙は悲しい涙じゃない。安心したのだ。夕威が隣にいてくれるということに。それだけに

きつともう、孤独に泣くことはない。独りじゃないから。二人一緒にいるから。きつと…きつと。

夕焼けも、悲しくないよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4130u/>

夕焼け～それから～

2011年9月3日11時08分発行